（資料―１）

西川和子氏「絵で綴る、スペイン史」のプレゼンテーションからの抜粋。

①1942 年イスラム教徒の国グラナダ王国を滅ぼし、スペイン王国を築いたカトリック両王は唯一の息子ファン王子と長女イサベル王女の死亡という不幸に見舞われた。この為次女ファナ王女が王位を継ぐという番狂わせが起き、そのファン女王もハプスブルグ家のフェリペ美公に一目ぼれし結婚するも直ぐに夫を失い、悲しみのあまり、夜な夜な棺をもってカスティーヤ地を練り歩き「狂女王ファナ」と呼ばれ事態に陥った。ファナ王女はその後 46 年間もトルデシーシャス教会に幽閉されるという悲劇で一生を閉じる。暗い荒野で蝋燭の光をともし夫の棺を見つめるファナを描いた幽玄的な絵は「狂女王」を思わせる雰囲気を漂わせている。

②ハプスブルク家の血をひくカルロス１世（神聖ローマ帝国皇帝カール５世）が 1500 年に王になり､以後 1700 年のカルロス 2 世死亡までの丁度 200 年間をハプスブルグ家が王位を継続し、ヨーロッパの東と西の広大な領土を納めることになる。歴代の王は領土を守る為の多くの戦いを強いられますが、他方芸術を愛し、画家のティツィアーノ、エル・グレゴやベラスケスが登用され数多くの著名な肖像画や宗教画が生まれた時代であった。息子の婚約者を 3 度目の妻に娶とったフェリペ２世は、シラーが戯曲を書きヴェルディが作曲した有名なオペラ「ドンカルロ」のモデルである。

③エル・グレゴの有名な作品については、「聖衣剥奪」がキリストを侮辱しているとして不評であった理由や、「聖マウリティウスの殉教図」や「オルガス伯の埋葬」に描かれている意味と描かれている実在の人物名および美人を好んだグレゴの「懺悔するマグダラのマリア」、「白貂の毛皮をまとう貴婦人」等、絵に関する種々の話題が紹介された。
又、「フェリペ４世像」「ウルカヌスの鍛冶場」「軍神マウス」「鏡のヴィーナス」「織女たち」「ラス・メーニャス」のベラスケスの作品が紹介され、裸体を描くことを禁じられていた当時、神話を描くことで裸体画に挑戦したベラスケスが紹介された。特に、「ウルカヌスの鍛冶場」で描かれているのは、神アポロンが鍛冶屋の神ウルカヌスに妻ヴィーナスが軍神マルスと浮気していると告げた瞬間をとらえたもので、ウルカヌスの驚きの表情が大変印象的である。

④1701 年、5 代目のカルロス 2 世は、祖父の代からの近親結婚が続いたせいか病弱で子供に恵まれなかった為、再び欧州全体を巻き込むスペイン王継承問題が発生する。妹マルガリータの嫁ぎ先のハプスブルグ家（神聖ローマ帝国皇帝）にいる二人の候補者が死んだ為、止むを得ず、スペイン王位継承を放棄しフランス王ルイ 14 世に嫁いだ姉マリア・テレサの

孫アンジュー公(フェリペ５世)をスペイン王として迎え入れ、ここにブルボン家の時代が始まるのである。「憎きフランス」で懲り固まっていた初代フェルナンド国王からすれば許されなかった事ではと思われるが、スペイン王室継続の苦労と、当時のヨーロッパの各王室間の結婚政策による姻戚関係を仔細に知ることが出来た。

⑤ブルボン家王室の時代に活躍した宮廷画家ゴヤの有名な作品「裸のマハ」、「着衣のマハ」が紹介され、そのモデルは誰か？の歴史論争について紹介があった。顔立ちからするとアルバ公爵夫人ではとの噂が立ち、夫人の墓まで掘り起こし確認する騒ぎを起こしたそうであるが、描かれた時期からすると、カルロス 4 世の時代に政治権力掌握していた宰相マヌエル・ゴドイの恋人ペピータである説が有力である。

以上